

【研究ノート】

# 風景構成法に寄せ，宮沢賢治作品を読む

—その風景に宿るサイエンティスト達—

Applying the Landscape Montage Technique to understand the works of MIYAZAWA. Kenji,  
The scientific mind observable in his landscapes

栗原文子\*  
KURIHARA Ayako

キーワード：古川仲右衛門，M. A. Millardet，高田鑑三

Key words: Furukawa Nakaemon, M. A. Millardet, Takada Kanzo

## はじめに

2019年12月以来，新型コロナウイルス感染症のパンデミックが止まらない。行く手の見当などつかぬまま，時間だけが過ぎて行く。人との対話の機会が減り，一人では頭の中が堂々巡りを繰り返す。気は塞ぎ，そこへ孤独が押し寄せてくる。スペイン風邪が日本を襲った100年前はどのようなであったかと思いめぐらす。

スペイン風邪第2波が徐々に広がりを見せはじめた1918年暮れから翌年初春頃までのことである。多感な青年宮沢賢治（22歳）は東京に約2か月に渡って滞在し，さまざまな人々と直に意見を交わし，市中をつぶさに見聞するという未曾有な体験をした。其ののち15年の年月を経て多くの宗教的思索に富んだ作品を書き遺し，生涯を閉じた。

## 手帳に広がる風景

筆者は，宮沢賢治（1896-1933，詩人，物語作家。以下，賢治と略記。）が亡くなる2年前，手帳に書き遺した『雨ニモマケズ』の詩の一節「ヒドリノトキハ ナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ…」をつぶやいてみる。

## 『雨ニモマケズ』

（読んでおきたいベスト集！宮沢賢治より抜粋）

雨ニモマケズ  
風ニモマケズ  
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ  
丈夫ナカラダヲモチ  
慾ハナク  
決シテ瞋ラズ  
イツモシズカニワラッテキル  
……  
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ  
小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ  
東ニ病氣ノコドモアレバ  
行ッテ看病シテヤリ  
西ニツカレタ母アレバ  
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ  
南ニ死ニサウナ人アレバ  
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ  
……  
ヒドリノトキハナミダヲナガシ  
サムサノナツハオロオロアルキ  
ミンナニデクノボートヨバレ  
ホメラレモセズ  
クニモサレズ  
サウイフモノニ  
ワタシハナリタイ

\* 文教大学大学院人間科学研究科付属臨床相談研究所

読みだすと、文字が一枚ごとの風景となって、目の前にとび出してくる。雨や風、雪が止んだ一瞬について、地表の水なる「川」、遠き「山」、そして耕せる「田」、行き来する「道」が暗示される。やがてそこに暮らす人々の「家」、「木」、「人」が息づきはじめ、「花」、「動物」、「石とか岩のようなもの」、さらに「足りないと思うもの、描き足したいと思うもの」がそばに親しく宿って、日々心通わすもの達として浮かび上がってき、それはまるで賢治による風景構成法（中井、1969）の世界そのものであると観ずる。

賢治の短歌や詩、物語を横断的に読み、そこにいきいきと映し出される自然界の風景を思い描きながら、筆者なりの体験的アプローチを試み、賢治の作品創出にかけけるエネルギーの元を辿ってみることにする。

## ヒドリは独り

「ヒドリ」を独りと認識する筆者にとって、その感覚はコロナ禍にあってより一層深くなる。賢治と同じ岩手生まれの筆者の祖父は、「ひとり」をきまって「ヒドリ」と発声した。子どもであった筆者は、深い暗がりのをぞいた気がしたものである。その暗がりひきよせたか、コロナ禍にあって頻繁に賢治の作品を思い起こす。

詩の冒頭「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ…」は、つとに有名である。そしてなににせよ、風雨や寒暑などの自然現象（金田一他、1959）を巧みに前面に押し出して綴っているという点で、まず事象をサイエンティフィックにとらえ普遍化し、心象スケッチとよぶ抽象度の高い作品へと創り上げて行く姿勢が際立つ、窮めて賢治らしい純一の作品である。この詩に限らず、賢治の作品には描き出される風景の中にサイエンスの香りが高く漂い、時に化身となって姿を現す。ストーリーを牽引する役割を担って、その姿はりりしげに映る。100年という年月に研かれ、光をはなちつづけ、この上ない祈りのようにも感じられる。挿画1は、2021年6月に岩手大学構内に設置された記念碑である。

徹底したフィールドワーカーである賢治の作品

挿画1. リンゴ「はるか」誕生モニュメント



岩手大学農学部同窓会百周年記念  
2021年6月伊藤菊一氏撮影

について考えるときには、できる限り現地調査を試みるにこしたことはなからう。しかしコロナ禍渦中にある今、その活動には制約が多い。手元の辞書、参考書、現代の科学書、賢治が学んだと推定される教科書、インターネット情報等をたよりにすすめて行く。尚、風景構成法は、中井久夫（精神科医）によって1969年に創案された絵画技法の一つで、画用紙に順番に「川」、「山」、「田」、「道」、「家」、「木」、「人」、「花」、「動物」、「石とか岩のようなもの」、「足りないと思うもの、描き足したいと思うもの」を描き込んですすめて行く技法である。

## 盛岡高等農林学校農学科第2部に学ぶ

スペイン風邪・第2波が日本を襲った1918年（大正7）年、21歳の賢治は盛岡高等農林学校農学科第2部（大正4年4月6日入学、大正7年3

月15日卒業。以下、農学科第2部と略記)の最終学年にあつて、得業論文(≒卒業論文)『腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ對スル價値』を提出し、1918年(大正7)3月15日に挙行された第13回得業授与式に臨んでいる。5月からは、『地質土壤肥料』の為の実験指導補助となつて、しばらくの間、研究に携わつた。

## 古川仲右衛門と山田玄太郎

入学から三年、そうそうたる教授陣に学んだ賢治は、書き上げた得業論文最終行に、以下のような謝辞を述べている。「終ワリ監ガミテ本論ヲ草スルニ際シ、終始指導ノ勞ヲ執ラレタル古川教授、並ビニ多クノ注意ヲ賜ハリタル關教授ニ深謝ス。」「終始指導ノ勞ヲ執ラレタル古川教授」とは、土壤及肥料学、化学及化学分析担当の古川仲右衛門(大正3年~大正10年在職。)である。そして、「並ビニ多クノ注意ヲ賜ハリタル關教授」とは、鉱物及地質、物理及気象担当の関豊太郎(明治38年から在職。その後明治43年12月からドイツ、フランスへ留学。帰校し、大正2年~大正9年在職。)である。関豊太郎へむけられた表現、「多クノ注意ヲ賜ハリタル」とは、折角の注意を小言や叱責とうけたものか、読みようによってはなかなか辛辣であり、どぎまぎさせられる事柄である。

古川仲右衛門は、詩や短歌に登場してもいる。小岩井農場と題する詩、そのパートーには、「わたくしはずぬぶんすばやく汽車からおりた そのために雲がざらっとひかつたくらゐだ けれどももつとはやいひとはある 化學の古川さんによく肖たひとだあのオリブのせびろなどは そっくりをとない農學士だ さつき盛岡のていしゃばでも たしかにわたくしは さうおもつてゐた…」と、「…そっくりをとない農學士…」として岩手山を望む農場へつづく道をおそらくポプラやサイロをめがけて、足早に進むオリブ色の人が描写される。煙草の似合う物静かな紳士であつたという古川仲右衛門はまた、「ゆがみたる青ぞらの辺に仕事着の古川さんはたばこふかせり」と短歌にも詠まれ、賢治はこの物静かな農學士を空が「…雲がざらっとひかつたくらゐ…」に、そし

て「ゆがみたる青ぞら…」を仰ぎみるほどの気概をもって憧れ、尊敬していたように感じられる。

さらに賢治は、「植物及植物病理」を山田玄太郎(明治36年~大正10年在職)に学んでいる。筆者は「植物及植物病理」の授業担当が誰であつたかをなかなか特定できずにいたのであるが、農学科に賢治と一緒に入学し、寄宿舎も同室であり、「植物及植物病理」を受講した高橋秀松(1894-1975、農学科第1部に入学。後に宮城県名取市初代市長となる。)のエッセイ「賢さんの思い出 その1」によって、担当は「山田玄太郎博士」であつたと知ることができた(若尾, 2021)。

人間や動物と同じように草花や野菜等、植物も病気になるわけであるが、近代科学としての植物病理学は、このような植物を対象とする科学として1840年代に、ドイツ人植物学者ド・バリー、A. による病気のジャガイモの葉の研究として始まつたとされる(大木, 2019)。

さらに、日本における植物病理学の開祖は宮部金吾(1860-1951、以下、宮部と略記。)といわれる。宮部は、札幌農学校2期生として入学した際、同級生として新渡戸稲造、内村鑑三と出会い、生涯を通して親友でありつづけたという人物である。後に札幌農学校で教鞭をとつた宮部から植物病理学を教わつたのが山田玄太郎である。つまり、植物病理学に関する賢治の学びのルートは宮部へつながっているのである。

## ミラルデ

植物病理学の歴史に名を残すミラルデ(P. M. A. Millardet, ボルドー大学教授)は、1882年、植物の菌類病と細菌病に有効なボルドー液をつくつた人物である。ボルドー液がつくりだされるまでのエピソードとして次のようなことが伝わっているという。「ミラルデは、ブドウ畑沿いの散歩の道すがら、泥棒対策としてブドウの葉っぱに散布された青い硫酸銅と白い生石灰の粉を目にし、散布済みの葉っぱに病気の発生が少ないことに気づいて、それらの配合比を研究し、ボルドー液をつくりあげた」(大木, 2019)。青い硫酸銅と白い生石灰とが今にも眼に飛び込んで来そうな光景が浮んできて、思わずわくわくする。筆者は、

このミラルデを賢治が知らなかったはずはない、きっと、農学科第2部の授業が始まると同時に、ミラルデの名を目にし、耳にしていると想定する。

### ボルドー液の短歌

賢治はその年、1915年(大正4, 19歳)11月、次のような短歌を詠む。

[歌稿A] 248 「りんごの樹 ボルドウ液の霧ふりて ちいさき虹のひらめけるかな」

限りなく美しい短歌である。

賢治がミラルデを知った感激を“ちいさき虹のひらめけるかな”と詠みあらわしている、筆者はそう想うのである。霧のむこうの遠きフランス、岩手の山々に重なるサント・ヴィクトワール山やセザンヌの絵画の数々、そして葡萄の収穫に労する人々、ボルドー液の原材料としての青き硫酸銅、さらに石灰の岩までもがはっきりと眼に浮かぶ。まさに出色の短歌である。

### 高田鑑三

ミラルデに次いでもう一人、賢治を感嘆させたに違いないと筆者が考える人物がいる。高田鑑三(生年、没年不詳、農学士、滋賀農事試験場初代場長。以下、高田と略記。)である。高田の業績について、現代の植物病理学教科書に次のような記述がある。[表1-1 植物病理学の歴史「1895高田鑑三 RDV<sup>+1</sup>の昆虫伝搬を発見」<sup>+1</sup>RDV: イネ萎縮ウイルス](大木, 2019)。高田は、賢治が生まれる一年前の1895年、イネ萎縮ウイルスを発見を世界へ向けて発表している。自然界における微生物の存在について、いち早く着眼した人といえよう。

菌類、細菌、ウイルスなどの病原体の伝染によって、植物の成育がはばまれることがあることを賢治が学んでいなかったとは考えにくい。この植物ウイルス、しかも稲に関するウイルスの発見者である高田の名を、賢治が知らなかったはずはなからう。

偶然か否か、農学科第2部一年目の授業出席を終えた1916年(大正5年, 20歳)3月、賢治は

京都方面への修学旅行の一団に加わり、開設から約20年を経た滋賀農事試験場を見学している。

### 高田の著書『實用教育農業全書第拾編』

賢治の作品のなかには、高田の著書『實用教育農業全書第拾編』も含む全十二編からなる『實用教育農業全書』(1892, 博文館)との邂逅がなければ書き得なかったと思われる箇所がある。『銀河鉄道の夜「九, ジョバンニの切符」』から、その箇所を含む一場面を記す。

[九,] ジョバンニの切符

(校本 宮澤賢治全集第十巻より抜粋)

「もうこゝらは白鳥区のおしまひです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるやうな、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとほった球が、輪になってしづかにくるくるとまはっていました。黄いろのがだんだん向ふへまはって行って、青い小さいのがこちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、たうたう青いのは、すっかりトパーズの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。……銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんたうにその黒い測候所が、睡つてゐるやうに、しづかによこたはったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕りが云ひかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立ってゐて云ひました。鳥捕りは、だまっかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちょっと見て、すぐ眼をそらして、(あなた方は?)といふやうに、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困って、もじもじしてゐましたら、カムパネルラは、わけもないという風

で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあはててしまって、もしか上着のポケットにでも、入ってゐたかとおもひながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入ってゐたらかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらゐの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出してゐるものですから、何でも構はない、やっちまへと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて叮嚀にそれを開いて見てゐました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしてゐましたし灯台看守も下からそれを熱心にのぞいてゐましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだつたと考へて少し胸が熱くなるやうな気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたづねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑ひました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向ふへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だつたか待ち兼ねたというように急いでのぞきこみました。ジョバンニも全く早く見たかつたのです。ところがそれはいちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまつて見てゐると何だかその中へ吸ひ込まれてしまうやうな気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたやうに云ひました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢやない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニは赤くなって答へながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだといふやうにちらちらこつちを

見ているのがぼんやりわかりました。

「もうぢき鷺の停車場だよ。」カムパネルラが向ふ岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云ひました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずにはかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたやうに横目で見てあはて、ほめだしたり、そんなことを一一考へてゐると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持つてゐるものでも食べるものでもなんでもやっしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つゞけて立つて鳥をとつてやつてもいい、といふやうな気がして、どうしてももう黙つてゐられなくなりました。ほんたうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊かうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうせうかと考へて振り返つて見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかつたのです。また窓の外で足をふんばつてそれを見上げて鷺を捕る支度をしてゐるのかと思つて、急いでそつちを見ましたが、外はいちめんうつくしい砂子と白いすゝきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖つた帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらう。」カムパネルラもぼんやりさう云つてゐました。

「どこへ行つたらう。一体どこでまたあふうのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言はなかつたらう。」

「ああ、僕もさう思つてゐるよ。」

「僕はあの人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕はさへんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もち、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

「何だか苹果の匂いがする。僕いま苹果のこと考へたためだらうか。」カムパネルラが不思議さうにあたりを見まわしました。

「ほんたうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入つて来るらしいのです。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョ

バンニは思ひました。……

まず、上記場面から浮かび上がってくる風景を風景構成法に寄せながら見て行くことにしよう。おおよそ次のようなことになるであろうか。

**【あまの川】**

目を見張るべきは「まるで花火でいっぱいのような」と言い表される「あまの川」である。夜空に広がる無数の星々“天の川”を光る花火でできている川に見立てるとは、如何にも古代人の壮大なる発想力にも似て、描き手の尋常ならざる未知に対する憧憬、そして探求心に合点する。

**【山頂の測候所と水稻栽培】**

山は、「…銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて立つ。そして山頂には堂々、「…黒い測候所が睡っているかのやうに、しづかによこたはったのです。」と述べてあり、まるで銀河のなかに黙想するブツがよこたわっているかのようである。ならば測候所の“水の速さをはかる器械の配備”とは、祈り、そしてサイエンスがもたらした最新の配備であろうか。近代サイエンスの伝播の力をかりて、順調に成育し、実りをもたらす作物への期待も込められているような気さえする。思わず麓に広がる田んぼの豊穡、はたまた海の幸としての魚群までもが眼に浮かんでくるような描写であり、心にくい。

**【乗務員、乗客たち】**

“銀河の鉄道”はループを描き天の道を走る。鳥捕り、ジョバンニ、カムパネルラの三人の席に、いつの間にか赤い帽子の背の高い車掌さんが「切符を拝見いたします。」とやって来る。ジョバンニが、切符？「さあ、」とあわてて、上着のポケットから「…何か大きな畳んだ紙切れ…」を掴んで車掌さんへ渡すと、車掌さんは佇まいを正しながら切符を読み、灯台守までもがそれを下から熱心にのぞいたのである。

**【ジョバンニの切符】**

突如あらわれた“ジョバンニの切符”は周囲の話題をさらい、さらにジョバンニの記憶を呼び覚ます。風景構成法上であれば、“ジョバンニの切符”は、「足りないと思うもの、描き足したいと思うもの」に該当しよう。それは、たいがい画面の全体をもっとよくわかろうとする時に役立つ、

とても大切な要素であることが多い。筆者は是非、その「…四つに折ったはがきくらみの大きさの緑いろの紙…」とは何であるか知りたいと思う。

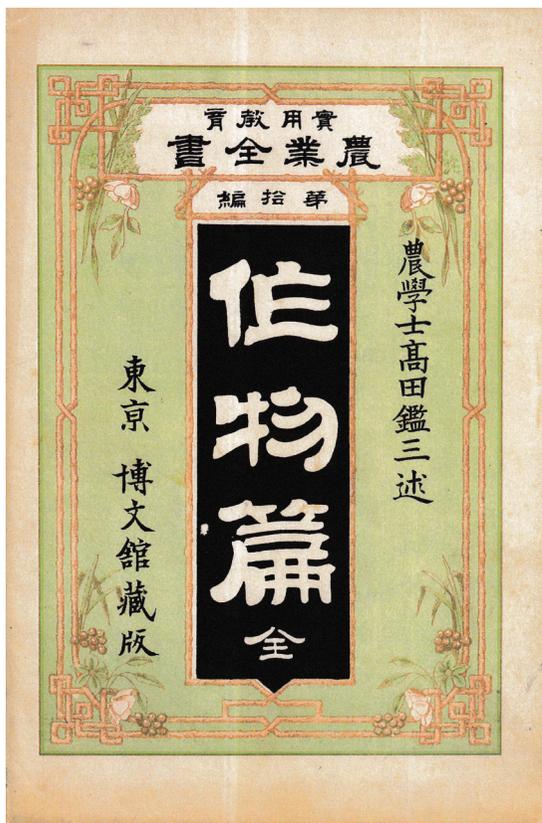
証明書か何かだったと考えていた“ジョバンニの切符”は車掌さんから、「これは三次空間の方からお持ちになったのですか。」というつぶやきとともに返され、ジョバンニはほっとして切符を開くのである。紙には、「いちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見てみると何だかその中へ吸ひ込まれてしまうやうな気がするのです。」とあり、さらに、横からちらっとそれを見ていた鳥捕りからは、「…こいつはもう、ほんとうの天上へさへ行ける切符だ…どこでも勝手にあるける通行券です。…なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか…あなた方大したもんですね。」と、法外の賞賛を浴びせられたのであった。ジョバンニが存在した空間を“三次空間”と云った車掌さんに次いで、鳥捕りが銀河鉄道の空間を“不完全な幻想第四次”と云う。鳥捕りの云うほんとうの天上とは、到底辿り着きようもない“四次空間”となろう。

**【砂子、鷺、りんご、野茨】**

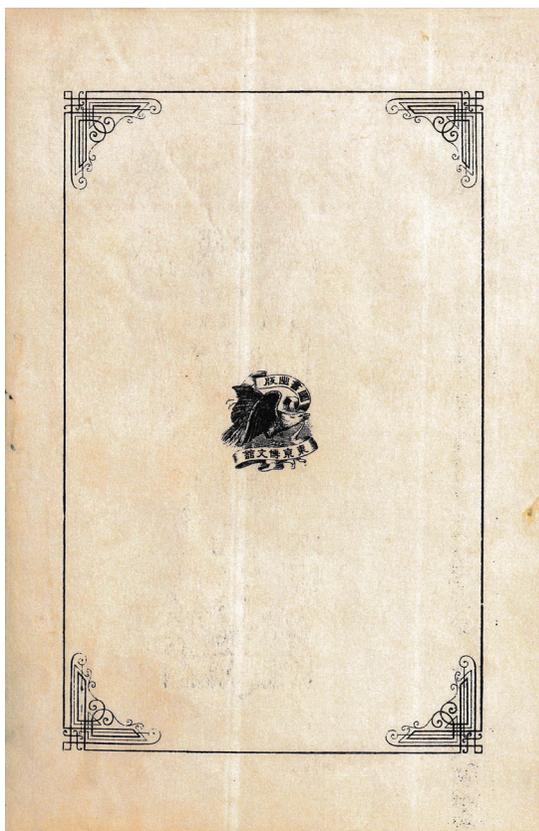
鳥捕りが消え去ったあとの描写がもの悲しくも美しい。曰く、「外はいちめんうつくしい砂子と白いすゝきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖った帽子も見えませんでした。」。ほどなく「もうちき鷺の停車場だよ」というカムパネルラの声がして我に返ったジョバンニのとなりにはもう鳥捕りの姿はなく、窓のどこからともなくりんごや野茨の匂いがしてきたのである。

さて、車掌さんが読み、灯台守に至ってはそれを下(裏?)から熱心にのぞきこんだというジョバンニの切符には一体何が書(描?)かれていたのであろう。ジョバンニ自身は証明書か何かに違いないと考えた切符である。唐草の模様の中にある十ばかりの印刷文字、ジョバンニが思わず吸ひ込まれてしまいそうになるもの、鷺の停車場、りんごや野茨の匂い等をヒントに考えつづけた結果、見つけ出したものがある。高田が著した200頁にわたる本、『實用教育農業全書第拾編』(1892年)の表紙、そして裏表紙である。

挿画 2. 表紙



挿画 3. 裏表紙



挿画 2.：表紙は緑色である。真ん中には漆黒に白抜きされて「作物篇」の文字が浮き出ている。そして四隅には野苺が薄ピンクの花を咲かせている。上部にはほぼ十ばかり、文字が印刷されている。挿画 3.：裏表紙中央には、鷺が「國書出版・東京博文館」と刻印されたりポンを啜え、今にも飛び立たんとして羽ばたく。そして四隅には、幾何学的にデフォルメされた唐草が整然と並ぶ。この美しくアトラクティブな装丁がほどこされた教科書に賢治がもし触れたとすれば、忘れることはあるまい。

#### おわりに

スペイン風邪を目前にした賢治は、すでに学んでいた植物病理学における植物ウイルスの知識をもとに、人体に感染し病気をもたらす場合がある

ウイルスの存在を感知していたと筆者は考える。特に、高田鑑三によるイネ萎縮ウイルスの発見を知ったことを事実とすれば、賢治の感慨はもはや測り知れない。また、ボルドー液を短歌に詠もうとは、賢治のほかにはあり得まい。賢治は優れた心象スケッチの描き手であるばかりでなく、サイエンスにおける学究の徒でもあったと言えよう。

#### 謝辞

伊藤菊一先生には、ボルドー液創出のメソッドを理解する上で、貴重なご助言をいただきました。ここに感謝申し上げます。

#### 【参考・引用文献】

- ・伊藤菊一 (2019)：宮沢賢治の得業論文を読む 40-83 賢治学第6輯 杜陵高速印刷出版部
- ・大木 理 (2019)：植物病理学 (第2版)3-11 東京化学

同人

- ・川原仁左エ門(1972):宮沢賢治とその周辺「賢さんの思い出(一)」60-62、120-121 刊行会出版
- ・金田一京助他(1959):新選国語辞典改訂版 211-212 小学館
- ・久保 進(2005):フォーラム/ドラマチックな学問史『岡田吉美著「タバコモザイクウイルス研究の100年」』4-9 TASC MONTHLY 2005.4
- ・校本宮澤賢治全集第一巻(1973):校異編 34、73、156-157、290、380 筑摩書房
- ・校本宮澤賢治全集第二巻(1973):56 筑摩書房
- ・校本宮澤賢治全集第十巻((1974):148-151 筑摩書房
- ・校本宮澤賢治全集第十四巻(1977):997-998、1024-1025 筑摩書房
- ・佐藤 司(2008):今日の賢治先生 永代出版
- ・高田鑑三(1892):實用教育農業全書第拾編 作物篇全博文館(筆者蔵)
- ・中井久夫(1984):風景構成法と私(注)270-271 風景構成法X 岩崎学術出版
- ・並木信久(2019):近代日本における農事試験場体制の確立—育種事業をめぐる—  
core.ac.uk.>download>pdf 21
- ・宮沢賢治イーハトヴ学事典(2010):146 弘文堂
- ・読んでおきたいベスト集!宮沢賢治(2011):別冊宝島編 565-574、309-313 宝島社
- ・若尾紀夫著編(2021):同窓生が語る宮澤賢治 盛岡高等農林学校と宮澤賢治 40-44、60-66、72-73、120-121 杜陵高速印刷出版部